



神戸の観光案内（その3）

～海軍操練所跡～

神戸大学 経済経営研究所
特命講師 小代 薫

神戸市中央区にある生田神社の参道（現在の生田ロード）は、そのむかし浜の方まで真っ直ぐ伸びていて、今の神戸旧外国人居留地を突き抜け、ちょうど京町筋と海岸通りが交差する現在のポルシェセンターの前辺りに一つ目の鳥居があった。この長さ 900m程の参道は桜並木で、岡本の梅林、湊川の松とともに、生田の桜として親しまれていた。

幕末、大阪湾の防衛が重要視されるようになると、ちょうどこの一の鳥居のふもとの海岸に海軍操練所が置かれた。具体的な位置についてはこれまで大体この辺りだろうと推定されていたのだが、今年の調査でその遺構とみられる石垣が出てきて少し話題になった。

明治元年に開港した神戸港は、この幕末の石垣の上に何層も増築するようにして形作られている。近代の遺構なので、壮大な歴史ロマンを想起するには弱いですが、構築物としては約高さ 3メートルくらいの範囲で複数の石組みが現れており、水面付近まで下りていくとそれなりに迫力がある。関係者全員が保存の方向で調整を進めているとのことだが、保存方法や展示方法によっては大きな初期費用や維持費が必要になるため、今後意見が分かれそうとのことである。

ここで幕末から明治初年までの神戸港の護岸整備の変遷をまとめてみたい。

I. 海軍操練所の造成（63年～64年頃か）

操練所自体は 1864 年に開設され 1865 年閉鎖されたことが知られている。しかし護岸の工法に関する史料は見つかっておらず、まだ誰も今回の発掘物を海軍操練所のものと断定できていない。

II. 開港前の旧幕府による居留地造成（67年10月～11月）

英国海軍の測量技師が準備した居留地計画図を元に幕府は兵庫奉行柴田剛中に工事を命じる。開港までに7割程度終わったとの柴田の報告がある。この時期の遺構も出ている可能性が高い。共に旧幕府による工事である。今回の発掘をI期のものとするにはI、IIを識別可能とする工法等の確認が必要である。

III. 外国人の苦情を受けた明治新政府による追加工事（68年6月～7月）

倒幕による工事の中断を経て、明治新政府外務局は普請用達嶋屋久次郎に工事を命じる。こちらが今回の調査場所も含まれてる可能性は高い。しかしこちらは英国人技師による詳細なレポートが残っており工法を確定できる。今回の発掘された石垣からも同様の工法部分が確認出来る。よってこれよりも下層にあるものがII期、あるいはI期のもとなろう。

幕末の居留地造成時にも何らかの護岸が築造されたと考えられると今回Ⅲ期の下層に発見され、いま各方面から検証を加えられている石垣一層が、同じ幕末でしかも4年しか建設時期が違わない旧居留地造成時のものではないことを明らかにすることが今後の課題となる。

保存施設完成の暁には、現物前でご説明させて頂く機会があれば幸いに存じます。